

近代における西洋人による漢字文献の比較研究

—Chalmers (1882)・Lay (1895)・Chamberlain (1899) について—

岡墻 裕剛

1. はじめに

近年、世界的な情報化社会の進展にともない、一般社会生活においても多漢字環境が求められるようになってきた。さらに、国家や地域を超えたCJK統合漢字の急速な成長に見るように、我々が触れる可能性のある集合としての漢字は、増大の一途をたどっている。こういった状況の中で、改めてその淵源を探るために、西洋と東洋の文化摩擦の中で、漢字制限・廃止論が説かれた時代の漢字集合について考えることは極めて深い意味をもつだろう。

岡墻 (2016) では、近代日本における漢字集合には西洋人によるものと日本人によるものという別の系統が存在したことに言及するが、本稿では、特に西洋人による漢字研究の成果に着目し、次の3文献の比較を行いたい。

- (1) Chalmers, John, *An account of the structure of Chinese characters under 300 primary forms*, 1882. (ASCC)
- (2) Lay, Arthur Hyde, *Chinese characters for the use of students of the Japanese language*, 1895. (CCUS)
- (3) Chamberlain, Basil Hall, *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*, 1899. (『文字のしるべ』)

前掲論文では、現代の日本人が日常的に使用する集合体としての漢字は、明治以降にその形と在り方が確定的になったもので、特に (3) が後の漢字文献に規範的な影響力を持っていたことを述べる。この文献は明治の日本研究の大家による西洋人向けの漢字学習書であるが、(1) と (2) はその作成時に参考として使用されたものとされる。(1) は中国語としての漢字を扱う文献であり、(2) はRoyal Asiatic Society-Korea Branchの会長であった人物が作成した文献である。それぞれ特性の異なった3文献を比較することで、地域を越えた漢字の結びつきとその相違点を明らかにすることができるかと期待される。

2. 先行研究

日本の符号化漢字集合の原典の一つである情報処理学会漢字コード委員会の「標準コード用漢字表 (試案)」(1971) 作成時には、日下部重太郎 (1933) 『現代國語思潮』續編の漢字表 (通称「日下部表」) が大元の参考資料として使用されたことが、池田 (2001) などによって指摘されている。また、同論文で挙げられる「日下部表」の13の主要な参考

(2)

資料の一つとして、大西雅雄（1941）『日本基本漢字』という文献がある。岡墻（2008）によると、「日下部表」と『日本基本漢字』の両者の成立には、Chamberlain（1899）『文字のしるべ』の内容が影響を与えたと指摘されている。

岡墻（2016）は、『文字のしるべ』のPrefaceにある謝辞にあたる記述を元に、この文献が8種の辞書・文献類を参考資料として用いたと考察している。漢字学習書である『文字のしるべ』を作成するために、漢和・漢英辞典だけではなく文法書類などを用いることは興味深いですが、本稿ではここであげられたもののうち、中規模の漢字集合を含む Chalmers（1882）ASCCと Lay（1895）CCUSに注目しつつ、特に3文献のうち成立年代の最も古いASCCについて言及したい。

3. Chalmers（1882）ASCC

3.1 Chalmersについて

ASCCの作者であるJohn Chalmersについては、Anderson（1999）*Biographical dictionary of Christian missions*¹に項目がある。主要部分を適宜日本語で要約すると、次のようになる。

チャルマーズ（Chalmers, John, 中国名：湛約翰, 1825-1899）中国のロンドン伝道協会（LMS）の宣教師。スコットランド北東部の生まれ、アバディーン大学を卒業後、チェスハント司教大学で神学を学ぶ。宣教師として1852年に香港へ渡り、同郷のJames Leggeの下につく。Leggeの一時帰国に際し当地での宣教活動の全権を委任され、Leggeの帰還後は活動の場を広東へ移す。1878年にLL.D（法学博士）を取得、1879年に香港へ戻る。1899年に朝鮮で死亡²、香港で埋葬される。

主な著作として*Origin of the Chinese*（1868）、『康熙字典撮要』（1878）³、*The Structure of the Chinese Characters*（1882）などがあり、聖書の文里（古典中国語）版の改訂に大きな役割を果たす。

このようにChalmersは、主に19世紀の香港・広東地方で布教と中国語研究を行った人物であった。関係者とされるJames LeggeもAnderson（1999）に項目があり、Chalmersと同じスコットランドの出身で、四書五経など中国古典作品の英訳に尽力した人物であったと

1 この項目の執筆者はGeorge A. Hoodで、記載内容の典拠はGeorge Cousins（1900）*A Life for China: A Sketch of the Late Rev. John Chalmers, LL.D.*によるとされる。

2 出典は不明だが、Google（<https://www.google.com>）では「死亡：1899年、韓国インチョン広城市」とある。

3 原文では“*The Concise Kang-Hi Chinese Dictionary*（1877）”とある。

される。Chalmersが中国に赴任することになった直接的なきっかけは不明だが、彼の中国での活動や中国語研究に対してLeggeからの影響があったことは確実であると思われる。

Chalmersの活動において注目しなければならないのは、その赴任地が広東地方であったため、広東語の知見があったという点である。上では紹介されていないが、彼の著作である『英粵字典』 (*An English and Cantonese pocket-dictionary, for the use of those who wish to learn the spoken language of Canton province*) は、英語と広東語の小型の対訳辞書で、1859年の初版から1891年の第6版まで出版され、長期にわたって重宝されていたことが分かる⁴。広東語については、彼の他の著作でも言及が多く、ASCCにおいても北京語とともに広東語の音韻を記すという特徴がある。

3.2 Chalmers, 1882, *An account of the structure of Chinese characters under 300 primary forms*. (ASCC)

続いて、ASCCの書誌情報をまとめる。

書名：The Structure of Chinese Characters. (表紙と内題)

AN ACCOUNT OF THE STRUCTURE OF CHINESE CHARACTERS under 300 primary forms; After the *SHWOH-WAN*, 100, A.D., AND THE *PHONETIC SHWOH-WAN*, 1833. (標題紙)

出版：London: Trübner, China: Kelly & Walsh Hong-Kong and Shanghai, Aberdeen: John Avery, 1882 /Shanghai-Hongkong-Singapore-Yokohama : Kelly & Walsh, 1911, second edition.

ページ数：x (再：viii), 199ページ

装 丁：赤の皮表紙による洋装本, 背表紙

サイズ：縦238mm×横150mm (紙幅), 縦246mm×横155mm (表紙)

直訳すると書名は『漢字の構造』となるが、標題紙によるとより厳密には「300の基本形に基づく漢字の構造についての報告—『説文』(100年)と『説文通訓定声』(1833年)以降を中心に—」といった内容になる。“primary forms”の正確な解釈が難しいが、本文では『説文』の小篆風の部首字による配列が行われているため、元々の漢字の「原形」という意味をも兼ね備えた表現かと思われる。

本書には二つの版があり、出版社と出版地に違いが見られる。1882年の初版では中国以

4 また、この辞典は明治の思想家・教育者であった西村茂樹による自筆の写しが存在し、現在は国立国会図書館に所蔵されている。(http://dl.ndl.go.jp/infondjlp/pid/2538032)

(4)

外にもロンドンとアバディーン⁵という著者にゆかりのある地域で出版されているが、1911年の再版はKelly & Walshによるアジアでの出版のみになり、横浜という日本の地名も存在する。Kelly & Walshは、1876年に上海で設立された洋書の出版社であり、日本関係も含めた当時の東アジアの出版文化に多大に貢献した。ASCCの再版は著者の死後のことであり、この出版の経緯や出版地域には当時のアジアの社会情勢が影響したものかと推測される。

版による異同はごくわずかで、初版の正誤表 (errors and omissions) の内容を反映したことと、標題紙のデザインと出版社・出版地の記述に変更があること程度であった。作者の死後の重版であるためか、基本的には加筆がなく、両版の内容はほぼ同一である。

資料構成としては、標題紙の前に活字による300の基本形一覧表 (the 300 primary forms as now written.) があり、次に漢字についての概説や本書の目的と使用方法を述べた序文 (introduction) 、続いて300の基本形による漢字の解説、巻末に『康熙字典』に基づく部首索引 (index of phonetics, sub-phonetics, and characters with independent sound, in the order in which they occur in the *concise dictionary on the basis of K'anghi*) と英語索引 (index of English words.) がある。

基本形とは、いわゆる部首字のような基本的な点画をもった字体で、画数順に個別の連番が与えられている。『康熙字典』の214部首とは内容が異なるが、巻頭の基本形一覧表 (図1) は現代漢和辞典の見返し裏の部首一覧のようであった。また、稿者が調査した東洋大学本 (再版) では、標題紙の隣のページに縦446mm、横280mmの十字に四つ折りした紙片が貼付されていた。こちらは“The three hundred primary forms of Chinese writing.”とあり、小篆風の文字で記した基本形の一覧表であった (図2)。この二つの一覧表は、本書独自の検字である。

序文は、本書の執筆目的から始まり、漢字の記号性、部首と音韻についての解説、『説文』 (Shwuh-wan) や『康熙字典』 (K'anghi) の文字数や問題点、本書で扱う300の基本形についての解説、諸注意といった内容が記されている。特に冒頭では、「象形文字である漢字の元となった事物との類似点を指摘し、個々の部分字形の有用性を解説することが主要な目的である」と述べる。300という基本形の数については、『康熙字典』の214という部首配列が『説文解字』の540部首に比べて、元々の漢字の字義や字形から乖離していることを批判した上で調節したものである。また、本書の『康熙字典』順による部首索引について、『康熙字典』の参照用に著者が作成した『康熙字典撮要』 (Concise Dictionary on the Basis of K'anghi, 1878) に対して、『説文』の解説書にあたる朱駿声『説文通訓定声』 (Phonetic Shwuh-wan, 1833) の諧声符引きの形式はそれほど有用性が高くないため、

5 Aberdeen スコットランド北東部にある町で、エディンバラ、グラスゴーに次ぐ第3の都市である。チャルマーズが生まれ育ち、大学卒業まで生活していた地域だと思われる。

部首引き形式の索引をあえて設けたということである。さらに、本文に出現する漢字は活字ではなく、作者がリトグラフ向けに手書きしたものである旨が記されている。この他にも序文からは著者の漢字観や当時の西洋人の漢字学習の様子を伺うことができ興味深い。基本的には本書は説文学の立場からの漢字解説書であると言える。

本文は、書名のとおりの300の基本形 (primary forms) に基づく一種の字形分類による漢字の解説である (図3)。まず画数順に基本形を1-300までの番号を設け、各基本形の中ではその音韻と意味 (本義) を述べた上で、その基本形に属す漢字をそれぞれの本義の順に記載する。漢字の四隅にはWilliamsに従った声調記号 (tonal marks: ˊ, ˋ, ˊˋ, ˋˊ) を付す。通常の基本形をもった漢字群の後には、上下反転 (inverted)、左右反転 (reversed)、横向き (placed side-ways)、省略形 (contracted)、理義字 (doubled, tripled, quadrupled) といった派生形をもった漢字を紹介する。同一分類内での漢字の配列方法は不明である。

漢字の直後にあるイタリック体は広東語 (Cantonese) の音韻を表し、その次に北京語 (Pekingese) の音韻を表している。当時の清国の公用語であった北京語 (官話) よりも、広東語を先に掲載することから、Chalmersの興味関心がこちらにより強く注がれていたことが分かる。

丸括弧内の数字は、参照すべき他の基本形の番号で、該当する番号の位置にもそれぞれの漢字が重複して掲載される。そのため、どちらの基本形からでも漢字を検出可能である。これは、単なる部首引きの辞書とは一線を画す工夫であるが、重出字が大量に存在することにもなる。また、丸括弧内には『説文』の小篆を示す場合もあり、書体は異なるが、異体字の一種と見ることができる。

上記の理由により、本書に掲載されている漢字の総数を正確に把握することは困難であるが、本文における漢字の総数 (延べ漢字数) を試算してみる。171ページある本文から、無作為に10ページを選択し、重出字・異体字の区別なくそこに出現する漢字数を集計してみたところ、321字であった⁶。本文全体は171ページなので、 5489 字 ($=321 \times 171 / 10$) という数字が導き出される。標準偏差がやや大きい (7.08)、概算では延べ漢字数で5000-6000字という規模の集合となる。

本文の後には、本書の掲載漢字を『康熙字典』の部首に沿って配列した15ページの索引がある (図4)。ここで示される数字は、ページ番号ではなく、基本形の番号である。一般的な漢字は左側に示すが、基本形と音韻が一致しない文字、現代風の文字、派生字は右側に示し、詳細は不明だが、『康熙字典撮要』で一つの見出し字の中に複数の音韻がある場合は括弧で結ぶ、とある。この索引に記載される漢字を集計すると、2115字であった。全ての部首に最低1字は漢字を配置し、最も所属数が多かったのは部首番号30「口」の80字、次に75番「木」の52字であった。この索引では、本文の漢字の収録漏れや重複掲出が

(6)

確認できるが、この2115字こそが本書の異なり漢字数（字種数）に近似した数値だと思われる。上記の延べ数とは大きな隔たりがあるが、本文では同一字が2-3度ずつ重複掲出されているということになる。

続いて、アルファベット順の英語索引がある。この索引は11ページ約2000語を配列する。こちらの数字もページ数ではなく、英単語が出現する基本形番号を示しているが、その意味に該当する漢字の提示はない。そのため、使用は容易ではなかったものと推測される。

4. 3文献の比較

4.1 Chamberlain, 1899, *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*. (『文字のしるべ』)

他の2文献についても、岡墻（2008・2016・2019）などにに基づき報告する。

『文字のしるべ』の作者であるBasil Hall Chamberlain（1850-1935）は、1850（嘉永3）年イギリス生まれで、1873（明治6）年に来日し、以降約40年にわたり幅広く日本語と日本文化の研究に尽力した人物である。特に『古事記』の英訳（1883）は高く評価され、1886（明治19）年には帝国大学文科大学の初代教師に就任し、教え子には上田萬年・岡倉由三郎らがいる。佐々木編（1948）のように、近代日本の言語学と国語学の成立・発展に大きく貢献した人物として、アストン、サトウとあわせて明治期の西洋人三大日本学者と称されることがある⁷。

『文字のしるべ』は、Chamberlainの日本関係の最後の書き下ろしの著作で、英題のとおり「日本語文字学習の実践的入門書」である。目的を問わず外国人が明治の日本で生活するために必要となる日本語の表記に関する内容を英文で解説する。菊倍判の大型の文献で、実践的な使用を想定し、厚みのある上質紙を使用している。実際にほとんどの現存本に、当時の使用者による書き込みが確認できる。

同書の本編は、12のSectionからなり、Section 4（the four hundred commonest Chinese Characters）以降は「基本漢字」についての記述が中心となる。Section 4では最も基本的な漢字400字の解説を行い、Section 5以降は漢字の構造、説話、地名・人名など、徐々にテーマが深化する構成となっている。基本漢字には初版2350、再版2490までの本文での出現番号を示すNo.があり、「一二三四五六七八九百千萬万日月明治何年…」といったように、常用度の順に掲出される。本文は英語で書かれるが、活字の漢字とともに手書き風の「筆写字体」（Writing Lesson）を例示するのが特徴で、日本語の例文と資料を多数掲載する（図5）。

索引（Index）として、『康熙字典』の部首分類に従った漢字表（図6）、音訓索引、語

7 Aston, William George（1841-1911）, Satow, Sir Ernest Mason（1843-1929）ともにイギリス人外交官で日本研究者でもあった。往復の書簡が残るなどチェンバレンとの交友も深かった。

彙索引が存在する。また、付録（Appendix）では、「基本漢字」習得後の自習用として約2000字の「追加漢字」がある。

同書には、1899年の初版と1905年の再版があり、再版では収録する漢字数が増加するとともに、基本漢字と追加漢字の間での字種の入れ替えなど、大幅な加筆修正が見られる。岡墻（2019）では、第3版の改訂も予定されていたが、関東大震災により計画が頓挫した後、Isemonger⁸（1929）*The elements of Japanese writing*としてSection4の400字を中心に再編集した文献が出版されたことが指摘される。

4.2 Lay, 1895, *Chinese characters for the use of students of the Japanese language*. (CCUS)

CCUSの作者であるArthur Hyde Lay（1865-1934）は、中国の芝罘出身のイギリス人外交官で、下関や仁川の領事や朝鮮総領事を歴任し、Royal Asiatic Society-Korea Branch（RASKB）の会長を務めた人物である。Layは幼少期を中国で過ごし、イギリス本国に帰国しKelso High Schoolを卒業後、独学で日本語等を学び、1887年見習通訳生として来日した。

本書は、洋装による小型英漢辞典で、扉、序文（Preface）、部首一覧表（Radicals）、漢字表形式の字典部、付録（Appendix）として、「名乗」（日本人の人名）、「國名」、「府縣」などのローマ字と漢字の一覧がある。漢字表部分が本編であり、全体の8割以上を占める。

1895年に横浜で初版が刊行され、再版（1897）、3版（1909）まで存在する。版を重ねたのは、外国人向けの辞典として、当時の使用者に好意的に受け入れられた結果だと判断できる。各版で、序文と一部の収録漢字が異なる。序文には複数の人物への謝辞があり、初版ではW. J. S. Shand, H. G. Parlett, Kashiwagi Shigefusa、再版と三版ではR. J. Kirbyという人物名が挙げられている。外交関係で活躍し日本アジア教会（TASJ）関係での著述がある外国人達と、国学者である柏木重總かと思われる。

また、初版の序文には、郵便報知新聞社「三千字字引」（1887）を英語に翻訳する許可を得た上で、それを改良して日本語学習者に必要な約4,000字を示したとある。しかし、再版以降はこの「三千字字引」への言及は存在しなくなる。「三千字字引」は、新聞上での漢字制限を目指して作成された郵便報知新聞の附録で、和訓のいろは順に基づく字引である。本書とは構成の面で大きく異なるが、「三千字字引」の英語版とも見なすことができる。

初版は3,899項目の漢字を扱い、『康熙字典』の部立てに従って画数順に配列し、音訓

8 Isemonger, Noel Everard（1883-1951）元イギリス海軍中佐。1921年から1943年までロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS: School of Oriental and African Studies）で日本語教師を行っていた。

(8)

と英語訳を載せる。1ページあたり6×5のマス目を設け、マスの中に各漢字の情報を示す(図7)。異体字や熟語を併記する場合もある。“Chinese-Japanese-English Dictionary”とされるが、中国語の音韻等の情報は見られず、日本語用に特化した内容である。

4.3 比較による影響関係の推察

上記のように、これらの3文献は、それぞれの作者の経歴も、作成された目的も、全て異なるものである。これを結びつけるのは、『文字のしるべ』が前の2文献に謝辞を述べた記述だけである。岡墻(2008・2016)などは、『文字のしるべ』の「基本漢字」が後世の漢字集合の成立と発展に影響を与えたとするが、同様に考えると、これらの参考資料はさらにその元となったはずである。そこで、これらの関係性について、類似点・相違点を通して言及したい。

図1から図7までを比較すると、外見上では、ASCCの本文(図3)と『文字のしるべ』の英文部分(図5左)、ASCC(図4)と『文字のしるべ』の漢字表索引(図6)が、それぞれ類似しているように見える。『文字のしるべ』の漢字の解説文の中には、中国語での音韻(Chinese sound)を示す箇所もあり、内容面でも共通点が見られる。ただし、日本語例文や右ページの筆写字体を含めた全体の印象としては、それほど類似性はないようにも思える。また、『文字のしるべ』の筆写字体(図5右)とCCUSの字典部分(図7)は、漢字の掲出方法が一致している。

『文字のしるべ』がASCCから受けた影響を調べるために、前者のSection 4で挙げられる「最基本漢字400字」について、ASCCでの有無を調べた。書体の差や重複の問題があるため、厳密な比較は不可能ではあるが、今回の調査では400字中278字が確認された。この結果を検証するため、同様に『文字のしるべ』とCCUSとを比較すると、400字中398字が確認できる。CCUSの方が収録する漢字の字種数(異なり数)が多いとは言え、最も基本的とされる漢字の約30%をASCCが収録していないということは、それぞれの文献の性質の差が大きいことに繋がる。すなわち、日本語向けの文献と中国語向けの文献、実際の使用を目的とするものと古学を継承する立場であることといった、それぞれの特徴の違いである。これに対し、『文字のしるべ』とCCUSとの漢字の一致率の高さは、目的が一致するというだけでなく、両文献の影響関係の強さの表れであると言える⁹。

しかし、ASCCから『文字のしるべ』への影響は限定的かという点、Section 5において類似点を確認できた。このSectionのタイトルはまさに“On the Structure of the Chinese Characters”であり、『文字のしるべ』の本文で小篆(anciently)として示される漢字が、

9 なお、意味(英語訳)でも同様の比較を試みたが、対象言語の差があるため参考となる数字にはならなかった。

ASCCのものと同様である(図8)。これらは34字あるが、いずれも類似した形がASCCの本文で確認でき、その原義(英語訳)も一致しているものが多かった。つまり、『文字のしるべ』は、漢字集合全体としてはASCCからの影響はそれほど強くないが、一部の記述、特に漢字の構造についての部分でASCCの内容を参考にしたと見られる。

5. おわりに

以上、本稿では、西洋人の作成した3文献を比較した。今回の研究結果をまとめると、次のことが指摘できる。

- ▶ASCCはこれまであまり研究がなされていなかったが、独自の特徴を多くもった研究価値のある漢字文献である。
- ▶今回取り扱った3文献では、『文字のしるべ』とCCUSとが集合としての一致率が高く、強い影響関係があったと推測される。
- ▶ASCCが『文字のしるべ』へ与えた影響についても、後者の本文の記述内容から確認できる。

また、『文字のしるべ』の本編は、縦書きと横書き、ローマ字・漢字・ひらがななどの複数の文字種が同一ページに表れるなど、組版上の困難を伴う複雑な構成をしている。これは、当時の他の漢字文献と比較しても類似したものが見つからず、かなり特殊かつ独自なものと考えられた。

しかし、ASCCに関連して調査したJames Leggeに、*The Chinese Classics, Confucian Analects, the Great Learning, and the Doctrine of the Mean.* (1861) という著作がある。これは中国古典作品の解説と翻訳を行ったものであるが、一見するとその構成は『文字のしるべ』に近いものを感じられる(図9)。具体的な検討にまでは至っていないが、前近代の中国関連の文献が西洋人の日本語研究にも関連していた可能性は大いに想定できる。今後はこういった観点を踏まえて、研究を進めていきたい。

参考文献

1. 池田証寿(2001)「日下部表の話」、京都大学大型計算機センター『第67回研究セミナー報告 東洋学へのコンピュータ利用』
2. 大西雅雄(1941)『日本基本漢字』、三省堂
3. 岡墻裕剛編著(2008)『B.H.チェンバレン『文字のしるべ』影印・研究』、勉誠出版
4. 岡墻裕剛(2016)「近代日本における基本漢字集合の系譜—『文字のしるべ』・Chinese Characters・「三千字字引」を中心に—」、加藤重広・佐藤知己編著『情報科

(10)

学と言語研究』, 現代図書

5. 岡墻裕剛 (2019) 「Isemonger (1929) *The elements of Japanese writing* について」, 神戸女子大学国文学会編『神女大國文』30
6. 日下部重太郎 (1933) 『現代國語思潮』續編, 中文館書店
7. 朱駿聲撰・朱鏡蓉參訂 (1972) 『説文通訓定聲』4版・上下 (中國學術名著第1輯, 增補樸學叢書第1集第3-4冊), 世界書局
8. Anderson, Gerald H. 1999, *Biographical Dictionary of Christian Missions*, Wm. B. Eerdmans Publishing.
9. Chalmers, John, 1882, *An account of the structure of Chinese characters under 300 primary forms : after the Shwuh-Wan 100, A. D., and the phonetic Shwuh-Wan, 1833*, Trübner / Kelly & Walsh / John Avery.
10. Chalmers, John (湛約翰創) 著・王揚安述釋 (1878) 『康熙字典撮要』, 倫敦教會 (HathiTrust Digital Library, <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.10093681799> で閲覧)
11. Chamberlain, Basil Hall, 1899, *A Practical Introduction to the Study of Japanese Writing*, Kelly & Walsh.
12. Isemonger, N. E. 1942. *The elements of Japanese Writing*. London: Royal Asiatic Society.
13. Lay, Arthur Hyde, 1895, *Chinese characters for the use of students of the Japanese language*, Shueisha.
14. Legge, James, 1861, *The Chinese Classics, Confucian Analects, the Great Learning, and the Doctrine of the Mean*, at the author's/ Trübner.

付記 本稿は、東アジア日本研究者協議会 (EACJS) 第4回国際学術大会 (2019年11月2日, 於台湾大学) において発表した内容に加筆修正を行ったものである。また, JSPS 科研費18K00631基盤研究 (C) 「近代日本における漢字集合の字種・字体の変遷」の成果の一部である。

129—
 水 (氵) *shui*, water. This is one of the commonest radicals, usually written on the left side of the character, thus 𠂔. It is

130—
 火 (火) *fo, hwo*, fire. This, like the last, is a very common radical, now often written 灬, at the bottom of the character. The

水 *minu*, "water," and 川 *kanou*, "river," anciently, as it should seem, identical in such slight variants as 𠂔, 𠂔, and 𠂔, all representing the ripples of flowing water.

貝 *kni*, "a shell," anciently 貝, a cowry or some such shell used for money.

火 *hi*, "fire," anciently 火, representing flames rising up.

図8 上:ASCC(1882) pp.99-100,下:『文字のしるべ』(1899) Section5, p.104

CONFUCIAN ANALECTS.

BOOK I. HSIO R.

論語 學而第一

子曰學而不思則殆。思而不學則殆。學而不思則罔。思而不學則殆。

子曰學而時習之不亦樂乎。有朋自遠方來不亦樂乎。人不知而不愠不亦君子乎。

CHAPTER I. 1. The Master said, 'Is it not pleasant to learn with a constant perseverance and application?
 2. 'Is it not delightful to have friends coming from distant quarters?
 3. 'Is he not a man of complete virtue, who feels no discomposure though men may take no note of him?'

TITLE OF THE WORK.—論語, 'Discourses and Dialogues'; that is, the discourses or discussions of Confucius with his disciples and others on various topics, and his replies to their inquiries. Many chapters, however, and one whole book, are the sayings, not of the sage himself, but of some of his disciples. The characters may also be rendered 'Digested Conversations,' and this appears to be the more ancient signification attached to them, the account being that, after the death of Confucius, his disciples collected together and compared the memoranda of his conversations which they had severally preserved, digesting them into the twenty books which compose the work. Hence the title—論語, 'Discussed Sayings,' or 'Digested Conversations.' See 論語註疏解經序. I have styled the work 'Confucian Analects,' as being more descriptive of its character than any other name I could think of.

HEADING OF THIS BOOK.—學而第一. The two first characters in the book, after the introductory—'The Master said,' are adopted as its heading. This is similar to the custom of the Jews, who name many books in the Bible from the first word in them. 第一, 'The

of this book are occupied, it is said, with the fundamental subjects which ought to engage the attention of the learner, and the great matters of human practice. The word 學, 'learn,' rightly occupies the forefront in the studies of a nation, of which its educational system has so long been the distinction and glory.

1. THE WHOLE WORK AND ACHIEVEMENT OF THE LEARNER, FIRST PERFECTING HIS KNOWLEDGE, THEN ATTRACTING BY HIS FAME LIKE-MINDED INDIVIDUALS, AND FINALLY COMPLETE IN HIMSELF. 1. 子, at the commencement, indicates Confucius. 子, 'a son,' is also the common designation of males,—especially of virtuous men. We find it, in conversations, used in the same way as our 'Sir.' When it follows the surname, it is equivalent to our 'Mr.' or may be rendered 'the philosopher,' 'the scholar,' 'the officer,' &c. Often, however, it is better to leave it untranslated. When it precedes the surname, it indicates that the person spoken of was the master of the writer, as 子沈子, 'my master, the philosopher 沈.' Standing single and alone, as in the text, it denotes Confucius, the philosopher, or, rather, the master. If we render the term by Confucius, as all preceding translations have done, we miss the indication which

図9 Legge(1861)